

今日の僕の話には『Hold your own Africa in your mind』というタイトルが付いています。「あなたのアフリカでいいから、自分でアフリカのことを考えてみようよ」という感じです。

今日の話は、僕の、極めて個人的な、アフリカ体験に基づいたものです。ただし、個人的な話ではあるけれど、何らかの形で、この場にみなさんと共有できるものを生み出すことができないだろうか、と。そういうつもりでお話させていただきます。

そして、あなたたちが、あなたたち自身でアフリカについて考え、あなたたち自身のアフリカを見つけることのきっかけになればいいかなと思います。

結論じみたことを先に言うようだけれど、アフリカを心に抱きつつ生きることは、必ずやあなたたちの人生をより豊かにしてくれるはずです。

だから、「Hold your own Africa in your mind」なのです。

では、そもそもなぜ僕がアフリカに行くことになったかについてから始めましょう。

前川建築設計事務所という設計事務所に勤めて10年ちょっとくらい、僕は、忙しい毎日を送っていました。そんなある日のこと、母校の大学の先生から電話が掛かってきました。日本の援助で建てられたナイロビの大学で一年ほど建築を教えてみませんかという誘いでした。

僕自身はアフリカへの関心はまったくありませんでした。ナイロビがどこにあるのかも知らない。人に教えた経験もない。ただ見知らぬ土地で、やったことのない仕事に取り組むことへの好奇心から、とにかく行ってみようと思いました。1994年4月のことです。

ここで少し、補足しておきましょう。

僕をアフリカに派遣したのは、JICA、つまり、国際協力機構、当時は、国際協力事業団でした。協力隊ではなく、長期派遣専門家という立場での派遣でした。

JICAは、ODAの一貫でケニアに、ジョモ・ケニヤッタ農工大学という大学を設立しました。大学の施設や機材を供与するばかりでなく、カリキュラムの編成や教員の派遣といったソフト面でも手助けをしていました。たまたま、僕の母校の大学が、その大学の建築学部設立の面倒を見ていたので、僕に白羽の矢が当たったというわけです。英語が多少、堪能なことと、勤めていた職場がそういう制度による休職を寛大に認めてくれるところだったのが、大きな要因だと思います。

この人選がJICAにとって良かったのかどうかはよく分かりませんが、少なくとも僕自身にとっては、アフリカでの一年はその後の人生を左右するほどの貴重な経験に満ちた、珠玉のような一年でした。

さて、話をもどしましょう。

ジョモ・ケニヤッタ農工大学は、ナイロビから車で4、50分いったところにあるティカという町にありました。僕が担当したのは建築の理論と設計の指導でした。

ところが、着任早々、「失語症」になってしまった。つまり、日本では当たり前に通ずるはずの建築の言葉、例えば「近代化」とか、「効率化」とか「機械化」とか、何から何まで学生には響かない、届かない、実感がわかない。

大学に着任してまだ日も浅いある日のこと、こんなことがありました。

大学の僕の部屋にいた時、コンコン、なにかに硬いものを壊す音が聞こえてきました。それがずーっと続いている。何だろうと思って、音のするほうへ降りていきました。すると、そこで僕が見たのは、一人の男が、たがね一本で、コンクリート製の水路というか溝というか、ともかく壊しているわけです。

もちろん、ケニアにだって、コンクリートを壊す機械くらいあります。

でも、なぜ、使わないのだろうか。

そこで僕ははたと気づいた。この国ではこうして生計を立てている人がいるのです。その男は、こうして日がな、水路を壊すことで、日本円でいえば50円か100円くらいをもらうのでしょう。機械で壊してしまえば、その男は暮らしていけなくなる。そういう国なんです。

で、改めて大学の構内を歩いてみれば、造りかけの校舎とかが、そこそこにある。

要するに、建て始めたはいいけれど、途中でお金がなくなって、工事が中断してしまっているというわけです。

本当に貧しい。アフリカの本当の貧しさに僕が初めて直面したのは、この時だったかもしれません。そういう国へ日本から飛んできて、建築の「機械化」とか「近代化」とか「効率化」なんて言葉が通じるはずがありません。

日本なら当たり前前に本屋で売っている建築雑誌や建築家の作品集なんかも、ひとつもない。

丹下健三とか安藤忠雄のように学生が憧れるような建築家もいない。

僕の中にある「建築」は、ただ北半球の豊かな国々にだけ通用する言葉や知識で成り立っていることに、改めて気づかざるを得ませんでした。

そんな僕に、この国の学生相手に何が教えられるのだろうか。

大学に着任早々、僕はこうして言葉を失ってしまいました。

そうこうするうちに僕はあそこに置いてあるようなスケッチを始めました。

そのきっかけというのは、こういうことです。

もともとは自分の暮らしに対する「閉塞感」からです。とにかく、車で大学とアパートを往復するだけの毎日が窮屈になった。

大学からの帰路、こんなことがありました。突然のスコールに襲われたんです。

車の外では数えきれないほどの人々がずぶ濡れになりながら歩いている。自分は濡れもせずアパートへ帰る。あまりにも違う境遇を目の当たりにして、僕のどこかで回路が変わったんだと思います。

こんなにたくさんの人々がこの街に暮らしているというのに、僕はどれだけのことをこの人たちについて知っているのだろうか……。

突然、そんな疑問がわきあがったのです。

それはいきなり頭を殴られたような経験でした。僕のナイロビ暮らしが始まってもう二ヶ月が過ぎようとしていた頃のことです。

それで僕はどうしたか。

とにかく車を降りて、街を歩いてみよう。それもスケッチの道具を持って。

なぜスケッチの道具をもったか。僕なりに理由があるのです。

とにかく、それまでは車の窓から眺めていただけの人々のそばに行き、じっと見ていたかったのです。スケッチをしていれば、それができるでしょう。

でも、初めから人々を描けたわけではありません。街の人々に声を掛けることなどとてもできませんでした。声を掛けてきたのは、街の人たちのほうです。

人々に近づきたいと思いつつもできないでいる僕は、ナイロビの街角でたとえば石造りの教会とか、古い木造のホテルとか、要するに声を掛けずに描けるものばかりを描きながら、人々を遠巻きに眺めていたのです。

すると、人々のほうから僕に声を掛けてきた。

「素敵な絵ですね」とか、「横で見物していていいですか」とかね。

これで人々との距離が一気に縮まりました。

そして、今度は僕のほうから声を掛けてみよう、そう思うようになったのです。

それこそおずおずと、僕は人々に声を掛けていきました。「あなたを描いていいですか」とね。

これがナイロビに暮らし始めて三ヶ月くらいの頃。

さらに二ヶ月ほどすると、もう余裕しゃくしゃくでスケッチブック片手に街を歩くようになりました。

人々への好奇心から始まった僕のスケッチもやがて、人々と交わるための手段へと変わってゆきます。

「あなたを描いていいですか」と相手にたずねることからスケッチは始まります。

初めは僕から少々、金をせしめてやろうなどと考えている相手も、僕が真剣に見つめ、描き進めるうちに落ち着いてくる。

途中で、絵の出来具合が気になってのぞきに来る。

この瞬間が僕は好きです。のぞいた紙に自分がいるのです。そういう時の驚きようはすごい。「アイヤー」と叫び、顔を覆う女。ゲラゲラ笑い出す男。スケッチの間に、いつか必ずこういう一瞬があります。本当のスケッチがこの時から始まるのです。

この時から、僕と相手との「間」が変わる。もっと正確に言えば、それまで相手と僕との間にあったフィルターのようなものが変わってゆくのです。

これは風景や物を描いては起こらない。生身の人と人との「間」だけに起こりうる変様かもしれません。

僕はスケッチをする相手にお金を払うようなことはしませんでした。

金を渡して描いたほうが、ことはすんなり運んだでしょう。しかし、その場合、相手はただ金のために描かれるようになるでしょう。

相手には金が残る。僕にはスケッチが残る。でも、相手と僕との間には何も残らない。

僕は、人々と僕の「間」にかけがえのない時間を切り開くためだけに描いていたかったのです。だから、金を渡して描くようなことはしませんでした。

ここで僕が描いてきたスケッチの一部をご紹介します。

### 1. ジャカランダの咲く道端

これは典型的なナイロビの道端の風景です。

トタン屋根の、今にもつぶれてしまいそうな小屋が並んでいます。これは、みんな、食堂とか、よろずやです。ナイロビの普通の人たちは、毎日、こういうお店で買い物をしたり、食事をしたりしています。背景の紫色はジャカランダという樹の花ですね。



### 2. おもちゃを売り歩く男の子

この子は17、8歳ってところでしょうか。針金で作ったおもちゃを売り歩いていた。こうやって柄を持って、走らせると自転車に乗った小さな人形がチャカチャカ、自転車をこぐ仕組みです。こういうおもちゃを自分で作って、売り歩いて、この少年は生活しているわけです。



### 3. チョコラボーイ

これは、ストリートボーイ。現地では彼らのことを「チョコラ」と呼びます。可愛らしい響きですけど、「ゴミ漁り」というような意味の「蔑称」です。この子が根城にしているのは、日本で言えば、新宿みたいな繁華街。花屋なんかが軒を連ねています。この子は、花屋が捨てた花をゴミ溜めから拾い集め、輪ゴムで留めて、また花束にして、売り歩いていました。運よく売れば、フライドポテト一袋くらいは買える。夜はビルの片隅で仲間と一緒に固まって、眠る。そうやって街の道端で生きている子です。



### 4. スラム街の仕立て屋

このおじさんはスラム街で仕立て屋をやっています。丁度、帽子を直しているところです。後ろには、お客さんから預かったシャツやズボンがぶら下がっています。服をあつらえるより、修理が専門のようです。こういうふうにはミシンなんかを持っていれば、生計が立てられます。スラム街の人たちは、こうして自分たちで仕事をひねくりだして、互いに助け合いながら生きています。



## 5. ちり取りを売る少年

この男の子が手に持っているのは、ちり取りの束です。ブリキの板からこの子が自分で作ったものだそうです。まだ始めたばかりだけれど、職人さんの卵ですね。ナイロビの道端にはこういう子どもたちが、自分で生きる術を学びながら育っています。



## 6. 豆売りの子どもたち

この子たちもストリートで生きている。ただ、この子たちの場合は、帰る家がないわけではありません。高級レストランの駐車場で、レストランに来るお客さんを相手にピーナッツを売っています。話を聞いてみると、みんな父親がいない。もちろん、学校へ行くようなお金もない。だからこうやって、一日、ピーナッツを売って過ごすことによって、母親の家計を助けているわけです。



## 7. 乞食

前のピーナッツ売りの子どもたちと同じレストランの駐車場にいた乞食のお兄さんです。この人、歩くことも、話すこともできない。レストランの駐車場にお金持ち風のお客さんが車で乗り付けてくると、四つんばいになって車まで、這っていき、お恵みを頂戴する。そうやってこの人は生きています。



## 8. ブリキ職人

さっきちり取りを売っている男の子の絵がありましたが、ああいう子はやがて、ここに描かれたような職人になるのが夢なのです。この人はブリキ板から何でも作ってしまう。僕が描いたときは、じょうろを作っていました。こういう職人のことを、現地の言葉では、「ジュア・カリ」って言います。「熱い太陽」という意味。屋根もない道端で、太陽にジリジリ照らされながら、汗水たらして働いているから、そう呼ばれます。でも、ストリートチルドレンたちの夢は、こういうジュア・カリになって、生活していけるようになることなんですね。



### 9. 苦学生

この人は、ストリートチルドレンではありません。ある立派な国立大学の大学生です。身なりもちゃんとしているでしょ。でも学費が払えなくなって、自分で作った家の模型を、こうして道端で売っているのです。でも、さっぱり売れない。この模型、僕が買いました。中の間仕切りまでしっかり作ってあって、なかなか良くできている模型です。



### 10. ピーナッツ売り

この人は道端で、バナナとピーナッツを売っている。このお姉さん、何か、しゃべっているように見えませんか？実は、僕のまわりでスケッチを見物している野次馬に文句を言っているんです。ナイロビにはこういう露天商みたいな人を取り締まる警官みたいな人たちがいます。で、こういう人を見つけると、取り締まりに来る。でも実際には、取り締まるのではなく、見逃し代を要求するわけです。50円とか、100円のはした金ですけど。でも、こういう人に見れば、大変な損害です。だから、このお姉さんは目だってそういう取り締まりに眼をつけられるのが怖いものだから、野次馬に「コー、見せもんじゃないんだから、あっちへいけ」と文句を言っている訳です。





## 11. ゴミ拾い

この人は二十歳くらい。ストリートチルドレンの成れの果ての、ひとつの典型と言ってもいいでしょう。さっきのブリキ職人みたいに、手に職を身につけられれば、それで生きてゆける。でも、ほとんどの場合、この人のように、屑拾いみたいになります。道端のゴミ溜めから金目になりそうな、金物の屑とか、プラスチックの廃材とかを拾い集めて、スクラップ業者に売って暮らしています。



## 12. 靴屋

この人は靴屋さん。道端の商売の中では、まともなほうです。腕さえ良ければ、お客さんがたくさん、やってきます。このおじさんも、随分、お得意さんを抱えていました。でも、無口な人でね。黙々と仕事していました。靴屋のくせに、どういう訳だか、自分は裸足なんです。ちょっとその理由を尋ねてみたかったんだけど、余りに無口な人なんで、僕もただ黙々とスケッチしました。



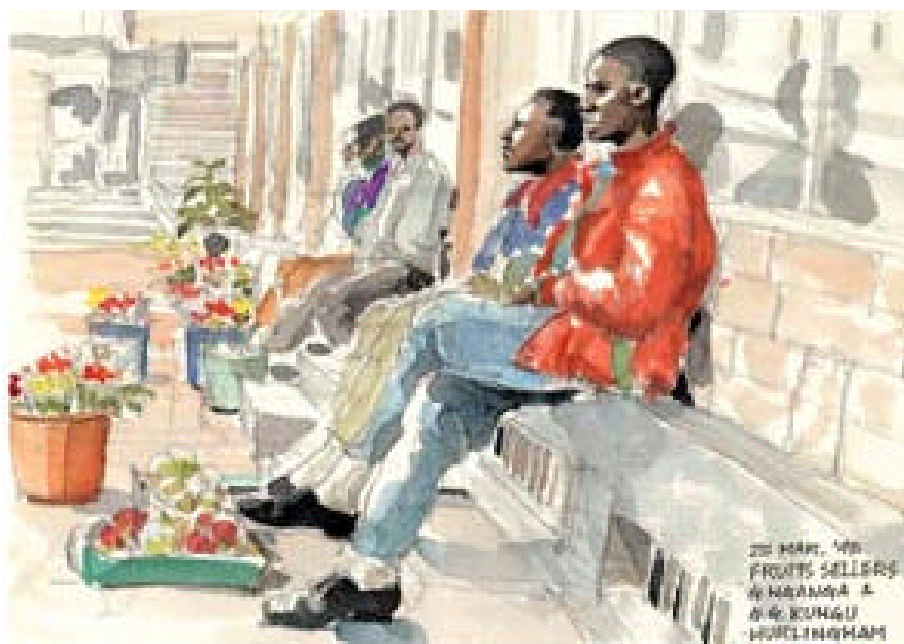
### 13. 車椅子の乞食

さっき、歩くことも話すこともできない乞食の話をしました。この人も同じレストランの駐車場にいました。やっぱり、車で乗り付けたレストランのお客さんから、お金を恵んでもらって暮らしています。ただ、この人の場合、事故か病気で歩けなくなる前は、学校の先生でもしていたんじゃないかと思わせるくらい、知的で物静かな雰囲気を感じさせていました。お金をもらうときも、さっきの歩けない乞食はほんとうれしそうにお恵みをもらうんだけど、この人の場合は違います。何かに耐え忍んでいるような、苦々しい表情で、お恵みを受け取るのです。



### 14. 花売り

高級スーパーマーケットの駐車場にたむろする花売りたちです。さっきのレストランもそうですが、お金持ちが車で乗りつけるような場所には、大抵、こういう花売りのような「たかり」を専門とする人が待ち構えています。ナイロビの住民を、ベンツを乗り回しているような「車の人」と、「道端の人」とに、大きく分類することが可能ではないだろうかと思えます。もちろん、「車の人」は、一握りの高所得者層で、他のほとんどの普通の人々は「道端の人たち」です。だから、僕のスケッチはナイロビの「道端の人たち」ばかりを描いたものだとも言えますね。



### 15. 泥人形売り

この人も前の絵と同じ、高級スーパーマーケットで「車の人」相手に泥で作った人形を売っていました。ナイロビの土産物屋で観光客相手に売っているのは、キリンとかシマウマといった動物の人形ばかりですけど、この人の作る人形は、違う。なぜか「道端の人たち」ばかりでした。道端の床屋とか、靴磨きとか、ゴミ箱を漁るストリートチルドレンとかです。面白いから、僕はこの人の人形を買い占めて、ケニア土産にしました。



### 16. チョコラボーイ

この子も繁華街の道端で暮らすストリートチルドレンです。スケッチの左上に、「チョコラ・ボーイ」と書いてあるのが見えますか？僕は描いたスケッチは、必ず、描いた相手にコピーを差し上げていました。この子にも、コピーを持っていきました。そしたら、この子は、「チョコラ・ボーイじゃなくて、グッド・ボーイって、書き直して」って言ったんです。「チョコラ」って、可愛らしく聞こえますが「ゴミ漁り」ですからね。そう呼ばれて、気分がいいわけありません。こういう子にもちゃんと誇りはあるんですね。僕は素直に謝るほか、ありませんでした。



さて、このようなスケッチを僕はどんどん描き重ねてゆきました。  
そして、どんなアフリカが見えてきたか。  
ひと言で言えば、貧しいばかりがアフリカじゃないということです。

「貧しいアフリカ」がないわけじゃない。でも、「アフリカが貧しい」という言い方には落とし穴がある。

まず、その「貧しさ」というのは、多分に僕たちが豊かに持っているものを尺度にした貧しさだということです。

とりわけ、僕のように「援助」という仕方であフリカに関わろうとすると、特にこの尺度が問題になります。かえって、アフリカを見えなくすることがある。その尺度こそが自分がアフリカにいる理由だからです。尺度を変えると、自分がアフリカにいる理由も、ひいては自分のアイデンティティーさえもぐらついてくる。

だから、自分にできること、自分が豊かに持っているものだけを尺度にして、それがアフリカにはないことを確かめつつ、敢えて言えば、知らず知らずのうちに、アフリカの「弱さ」や「貧しさ」を捜しながら、アフリカを見るようになるのです。

僕自身がそうでした。とにかく大学の連中ときたら、年がら年中、あれがない、これできないと嘆いている。「助ける 助けられる」という援助の構図にひたりきっているような状態でしたから。だから、こちらも「助ける側」に安住できました。

しかし、街の道端で暮らしている人たちは違いました。

確かにスラムのようなところへ行けば、眼に見えるものは、ただ「貧しい」としか言いようがありません。電気もガスも水道もない。満足な家も、清潔な食べ物もない。でも、街の人たちはそれがどうしたという勢いです。

僕がどれほどその街の「貧しさ」に眼を向けようと、街のあちこちから人々のエネルギーが押し寄せてきます。

「貧しさ」よりも先に、「貧しさを生き抜いている」人々の姿が眼に飛び込んでくるのです。

ないものや、できないことは多い。でも、今あるものも今できることもある。

「生きようとする力」さえあれば、生きる術はいくらでもある。

僕の眼からウロコが落ちたような気がしました。

そして、僕はスラムのような街でスケッチを続けながら思いました。

助けようなんておこがましい。人々は力にあふれている。助ける側から人々を見るのはもう止めよう。貧しさばかりが見えてきて、人々の力を見失うからです。

ある頃から、僕は人々の力を感じるために描くようになりました。つまり、スケッチは僕に「貧しさの向こう側」を見せてくれたのです。

初めはただ人々への好奇心から始めただけのスケッチは、人々と交わるための手段になり、やがて、人々の「力」を感じるための手段へと変わっていったのです。

こういう僕の経験から皆さんと共有できるところがあるのではないのでしょうか。  
それは、人と人との「間」には無限の可能性があるということです。

「Hold your own Africa in your mind」というタイトルの持つ意味もそこらへんにあります。  
アフリカは、実は、アフリカを見るときにフィルターさえ変えてゆけば、実に豊かな、力強い面も兼ね備えています。

「Hold your own Africa in your mind」という言葉が教えているのは、そういうフィルターをひとつひとつ、取り除いて、自分のアフリカを見つけてみようよということなんです。

それは、あなたたちが、自分の周りを見つめ直すことにつながるはずですよ。

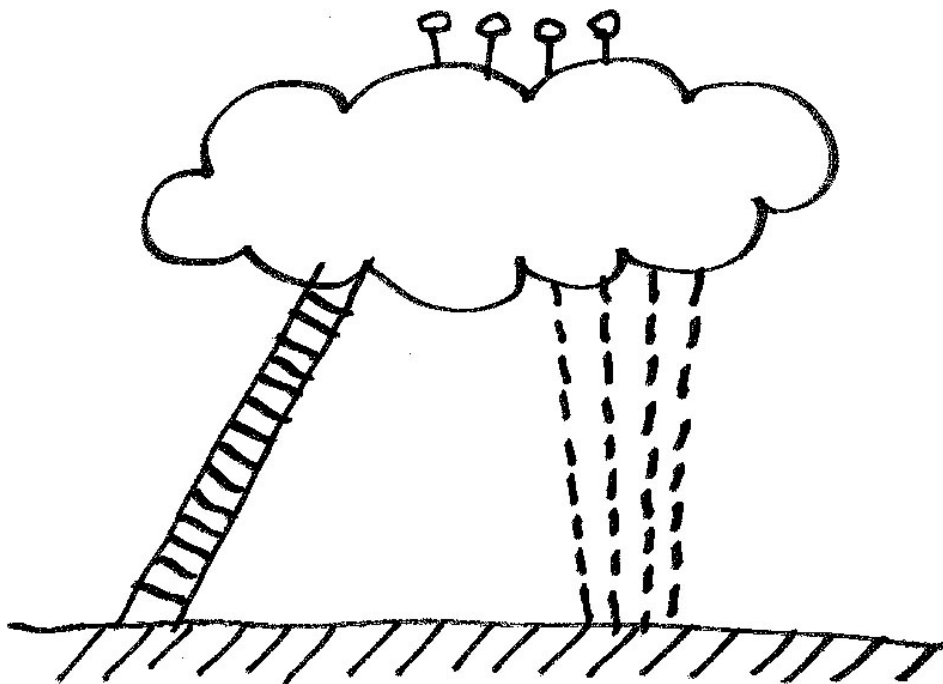
誰かに偏見を持っていないだろうか。自分が豊かに持っている尺度だけから、相手を見下すとか、もっぱら「助ける相手」、「かわいそうな人」としてしか見ないといったことがないでしょうか。  
そうしたフィルターを取り除くことによって、人と人との「間」をもっともっと柔軟で、いろいろな可能性に満ちたものにしてゆくこと。アフリカは僕たちにそう教えていると思います。

僕はナイロビの街でスケッチを続ける一方で、大学で教えるという二重生活のようなものを送っていました。

初め、「失語症」になってしまったと言いましたが、スケッチを続けるうちに、僕の中で本当に学生に伝えたいことも見えてきたような気がします。

学生はこの国のエリート予備軍です。ケニアという国は、実は貧富の差が激しい国です。一握りのエリートたちが国を牛耳っている。多分、学生たちの多くも、そうした雲の上の住人のようなエリートになってみたくて、大学に入ってきたんだらうと思います。それは僕にも分っていました。

ちょっと、この図を見てください。



これが大地です。ここには実に多くの人々が、援助とも技術支援とも無関係に生きています。そして、これが雲。この雲の上には、少数のエリートたちが生きています。ここにハシゴが掛かっています。

僕は、「技術協力支援」の名の下に、自分たちが学生たちに教えていた技術や知識は、学生たちにとって、「雲の上に昇るハシゴ」のようなものとして見えていたのではないかと思うのです。それがこのハシゴです。

大学での僕の仕事は、学生に先進的な技術や知識のもつ「力」を教えることでした。ケニアという国は今では貧しいかもしれない。けれど、いつかは先進国と互角に戦えるような国にならなければならない。そのための知識や技術を学生に伝える。それが僕に託された大学での仕事でした。多分、街で絵を描いていなかったら、僕もそれだけをして、日本に帰ってきたでしょう。

でも、僕はスラムのようなところで絵を描き続けるうちに、大学で求められている「力」とは、まったく違う「力」を街で生きている人々の中に発見してしまったのです。

しかも、僕はこう思いました。僕自身がそうだったように、学生もまた、こういう技術や開発とは無縁の人々が持っている「力」を見失っているのではないだろうか。そして、その責任の一端は僕たち派遣専門家にあるのではないかと思ったのです。

僕たちは日本から来て、技術を教えている。しかし、日本の技術をそのまま持ってくるわけにはいきません。そこで、風土や社会の条件からできるだけ影響を受けない面が強調されることになります。技術を生み、育てたはずの風土や社会のことは省略され、世界のどこへ持っていっても通用する「即効力のある部分」だけが伝えられるのです。

しかし、風土や社会から切り離された技術は「根無し草」のようなものです。そういう技術のもつ力は恐ろしい、と僕は思います。世界のどこにでも通用する力は、国と国との垣根を飛び越えはするが、その国に固有の問題には答えようとしなからず。答えようとしなければ、ある社会や文化がもともと持っている力や価値を「封じ込める力」として働くこともあるのです。

例えば、プレファブ工法による建築。建物の壁や骨組みをどこか先進国の工場で作ってきて、現地ではそれをパタパタと組み合わせていけば建物が出来上がってしまう。そういう建物ならケニアのどこにだって、立派なホテルや学校が建てられます。でも、そういう先進的な技術の影では、たとえば、現地の人々が力を合わせ、その土地にしかない材料を使って建物を建ててゆくことの意味は、見失われてしまうのではないのでしょうか。

そういう技術が教室で学生へ教えられているわけです。大学が目指している「世界の動きに取り残されない」という目標にはふさわしいかもしれませんが、この国の社会にあふれている問題に学生が立ち向かうための力にはなりにくいでしょう。

僕たち、派遣専門家が技術を「根無し草」のようなものとして教えている限り、学生がこの国の問題だらけの社会から眼を背け、「雲の上の住人」に憧れるのも無理からぬことのように僕は思いました。僕たちが伝える技術や知識は、学生を社会に根ざすことではなく、むしろ、社会から遊離することへと誘うのではないか。それは、学生たちにとって「雲の上に昇るハシゴ」のように映っているのかもしれない。僕は、そんなふうに思いました。

大学で技術の「輝かしさ」だけを教えられた学生には、道端で汗水たらして働いているような人たちのことなど、眼に入っていないに違いない。ましてや、スラムで暮らしている人々や、ゴミ溜めを漁っているチョコラたちのことなど、侮蔑の対象以外のなにものでもないでしょう。

でも、それでいいのでしょうか。

雲の上の住人。

道端で働いている人たちを高いところから見下ろしているだけの、雲の上の住人。

僕は自分の教える学生に、そういう住人になってほしくはありませんでした。

それは、僕にとっても、学生自身にとっても、ひいてはこの国の未来にとっても幸福なことであるとは、僕には思えませんでした。

雲の上の住人は大地から切れている。いわば、「根無し草」のようなものです。

そんな人間になることは幸せでしょうか。

そんな少数の人間だけに牛耳られている国は幸福でしょうか。

僕はそんな人間を育てるためにケニアに来たわけではありません。

ところで皆さん、雲って、大地から浮いているように見えるけれど、本当は大地に支えられていると思いませんか。なぜなら、大地から立ち昇る水蒸気が雲になっているわけですから。

だとしたら、雲は大地に支えられていると言ってもいいわけです。

さっきの図をもう一度、ごらん下さい。これが雲を支える水蒸気の柱です。

で、僕が学生に求めたのは、雲の上に住む住人になることではなく、雲を支える、つまり大地から立ち昇る水蒸気の柱のような人間に育ってほしいと思ったのです。

つまり、雲の上から人々を見下ろしているだけの人間ではなく、そういう少数のエリートたちと、大地の上でたくましく生きている人たちを結びつけるような人間。

人々といつも共に生きているような技術者や建築家になってほしいと思いました。

僕はだから、学生に僕の描いた絵を見せました。街で展覧会もやりました。

こういう人々の持っている「力」を見失ってはいけないと僕は学生に伝えたかったのです。大学で教えられる「力」とは別の、こういう人々の「力」こそが、学生たちを、そしてこの国の幸福な未来を、導いてくれると気づいてほしかったからです。

街のギャラリーで展覧会をやった時のことです。

ある学生がふらりと入ってきました。僕の教える学生ではなく、ナイロビ大学の建築学部の学生でした。

その学生は僕にこう言いました。「建築家のあなたが、こういう人々に眼を向けたことは驚きです」と。なぜなら、「この国の建築家たちは高いところから人々を見下ろしているだけですから」と、そう言いました。

そして、その学生は会場に置かれたノートにこんな言葉を書き残していきました。

「これからも人々と共にあり続けてください。人生は短い。でも、忘れないで欲しい。人生の深さには限りがないことを。そして、人々と共にあることこそが、人生を限りなく、深くしてくれることを」

この言葉は僕が一番大切にしているアフリカ土産かもしれません。

僕はいまでも時々、自分に問いかけてみます。

自分は人々と共にあるだろうか、と。言い換えれば、人と人との「間」に生まれるものを大切に

いるだろうか、と。

自分のやりたいことだけを押し通すのではなく、相手の言いなりになるのではなく、相手と自分との「間」に、何かを発見し、生み出していくこと。

僕がアフリカから学び、今も大切に思っているのはこのことです。

だから、皆さんも、心にアフリカを持って欲しい。

そして、人と人との「間」にあるフィルターを取り去り、そこに隠された無限の可能性に気づいて欲しいと思います。



僕のアフリカ体験の話は以上で終わりです。

残りの時間を使って、国際協力や途上国支援という視点からもう少し、アフリカのことを考えてみましょう。

僕はこれからの先進国の人々、とりわけ、専門職といわれるような職能を持つ人々は、途上国のことを視野に入れながら、仕事をする義務があると思います。

今までは、欧米に追いつけ、追い越せがスローガンでした。だから、欧米だけに眼を向けていればよかったのです。これは日本と欧米の、いわば、「二極思考」です。

でも、これからは違います。欧米だけではなく、アジアやアフリカのこと視野に入れながら、仕事をすべきです。これを「三極思考」といいいいかもしれません。

実践してみればすぐに気づくと思いますが、三極思考にすると、とたんに、欧米に対する見方や考え方が変わってきます。べつの言い方をすれば、視野がより広く、豊かになります。そういう視野を持ちながら生きることは、確実に、人生をより豊かなものにしてくれると僕は思います。

だから、まず、皆さんには、「Hold your own Africa in your mind」という言葉に象徴されるように、欧米以外のもうひとつの視点、アフリカに限らず、いわゆる「第三世界」へ向けるまなざしをもってほしいと思います。僕は、それによって、あなたたちの人生が必ずより豊かになることを約束します。

それから、あなたたちのなかには、単にアジアやアフリカに目を向けるだけではなく、アジアやアフリカのために、なにか貢献したい、働きたいと考えている方もいらっしゃるかもしれません。最後に、そういう人のために、少し、ヒントを差し上げましょう。

アジアやアフリカのような途上国のために何らかの形で活動することを、ここでは仮に「途上国支援」と呼びましょう。

途上国支援について考える場合、僕は三つのキーワードがあると思います。

ひとつは、realizationという言葉です。realize という動詞の名詞形が realization です。僕は realize という言葉は実に不思議な言葉だと思います。「気づく」という意味と「実現する」という意味の両方を持っているからです。日本語にはない言葉だと思います。

では、なぜ realize が途上国支援について考える場合に重要なのでしょうか。

支援という行為は、本質的に「助ける-助けられる」という構図を持っています。

あなたたちはほとんどの場合、助ける側にいます。相手を助けるための知識や能力、物資、資金を持っているからです。そして、相手はそれらを持っていない。つまり、初めから、助ける側と助けられる側が、ある尺度、つまり、助ける側がたまたま相手より豊かに持っているものによって、仕切られている。だから、支援が成り立つわけです。ごく当たり前聞こえますよね。

でも、僕はこれが支援という行為が持つ、最大の問題だと思うのです。

結論からいみましょう。相手に対して、自分になにができるか、あるいは、なにをもって支援するか。それを相手と出会う前に決めることを止めるべきだと僕は思います。なぜなら、先ほどの僕の体験談で言ったように、「助ける側」に自分を置くことが、相手に対するフィルターを作ってしまうからです。そして、そのフィルターが、相手が本来もっている力を見失わせるからです。

通常の支援行為の場合、かなり早い段階から、相手に対し何をもって支援するかは決められています。ODAのような国家レベルの支援行為においても、あるいはNGOの団体が行なうような小さなスケールの支援行為においても、普通は、相手に何をすべきかは早い段階で決まっているのがほとんどです。予算設定やスケジュールのことを考えるならば、誰に対し、何をもって支援するかはなるべく早く決めておくべきというのが常識だからです。でも僕はそれを一度、白紙に戻してみてもどうかと思うのです。

簡単なことではないでしょう。

でも、僕はこう思います。支援をしようという人は、まずは、虚心坦懐に支援の場に自ら身をおき、支援する相手とさまざまな形で交わる。

そういうことを通じて、改めて自分の中を探り、相手に対して自分に何が出来るかを考えるべきなのです。

この時、キーワードとなるのが、realizeという言葉です。支援の現場となる風土や文化、支援の対象となる人々の中に身を置き、それらが潜在的に持っている力や可能性に「気づき」、それを「実現する」こと。つまり、今まで見えなかった相手の力をrealizeすること。これが本来の支援の姿ではないでしょうか。

初めから、私にはこれができる。相手にはこれができない。だからこれで助ける。そういう単純な構図では、本当の支援は生まれません。相手の可能性や潜在能力に気づき、それを形あるものにするところこそが、支援の現場で本当に求められる姿勢だと思います。これをrealizationというキーワードで表現しておきましょう。

次のキーワードは、replicabilityです。

replicaという言葉をご存知ですか？何かをそっくり「複製」することをいいますね。それに「できる」という意味のableを付けて、名詞形にしたのがreplicabilityです。硬い日本語ですが「複製可能性」ということです。簡単に言ってしまうと「再現しやすい」ということです。

これが何故、途上国支援を考える上でキーワードとなるのでしょうか。

支援者が相手に対して行なうこと、あるいは、相手との間に生み出すもの、それらは相手にとって、再現しやすいものでなければならないと僕は言いたいのです。

支援者は、いつかは支援の場から去らなければなりません。しかし、支援を受ける側の人々は、支援者が去った後も、支援者と生み出したものを、自分たちだけで再現することがあるでしょう。だから、支援者と支援される人々との間に生み出されるものは、再現可能、つまり、replicableでなければならないのです。

さっきの話で、僕は「プレファブ建築」の例を出しましたが、これは悪い例として最適です。プレファブ建築は、支援者にとっては簡単に実現することが可能です。しかし、支援者が去った後、その土地の人々が同じようなものを再現することは全く不可能です。

だから、途上国支援という視点から見たとき、「プレファブ建築」はreplicableとはいえません。ついでに、それは、その土地の風土や人々の力を見出してもいないし、実現もしていないので、もうひとつのキーワード、realizationという点でも欠落している支援方法だといえます。

replicability に話を戻しましょう。

replicable であるためには、支援行為はどうあるべきか。これを考えるのは、開発教育というフィールドにおいて、きわめて興味深い課題になると思います。

いや、開発教育だけでなく、これからの、ものづくりやデザインの世界でも replicability は重要なテーマになりうると思います。

ものづくりやデザインの世界では、今までは、いかに個性的で、人とは違ったものを造るかをプラス方向に考えてきました。そして、他人が再現しやすいこと、改変しやすいことは、むしろ低い評価を受けてきました。

でも、途上国を視野に入れた三極思考に立つ場合、むしろ再現のしやすさや、真似のしやすいことは、より有用で、リーズナブルなことなのではないでしょうか。

こうしたことを考えるのは、ものづくりやデザインの世界では天変地異といってもよいチャレンジングな試みです。だから、ここではあえて、余り多くを語ることは止めておきましょう。ぜひ、皆さん自身で考えてみてください。

すこしだけ僕なりに考えたポイントだけをいしましょう。

まず、replicable であるためには、現地で簡単に入手できる材料で造られるものでなければなりません。

そして、それはどのように造られたのかが分かるように造られなければならないと思います。

そのためにも、初めは現地の人々と一緒に造ることが必要でしょう。

それから、余り決まった形にしばるのでなく、多少、改変というか、自分なりのアレンジができるものであることも大切です。これが出来ると、人々の心の中に、自分でやった、自分で成し遂げたという達成感や、自分にも出来るという自信が生まれます。

これは支援という現場において、支援される側に一番、失われがちなものです。支援者だけががんばって、相手はただやってもらうだけ。だから、支援される側には自分たちでやったという意識もなければ、出来上がったものを、大切にしてくこうという思いも生まれません。こういう支援の産物はやがて、見捨てられてゆきます。

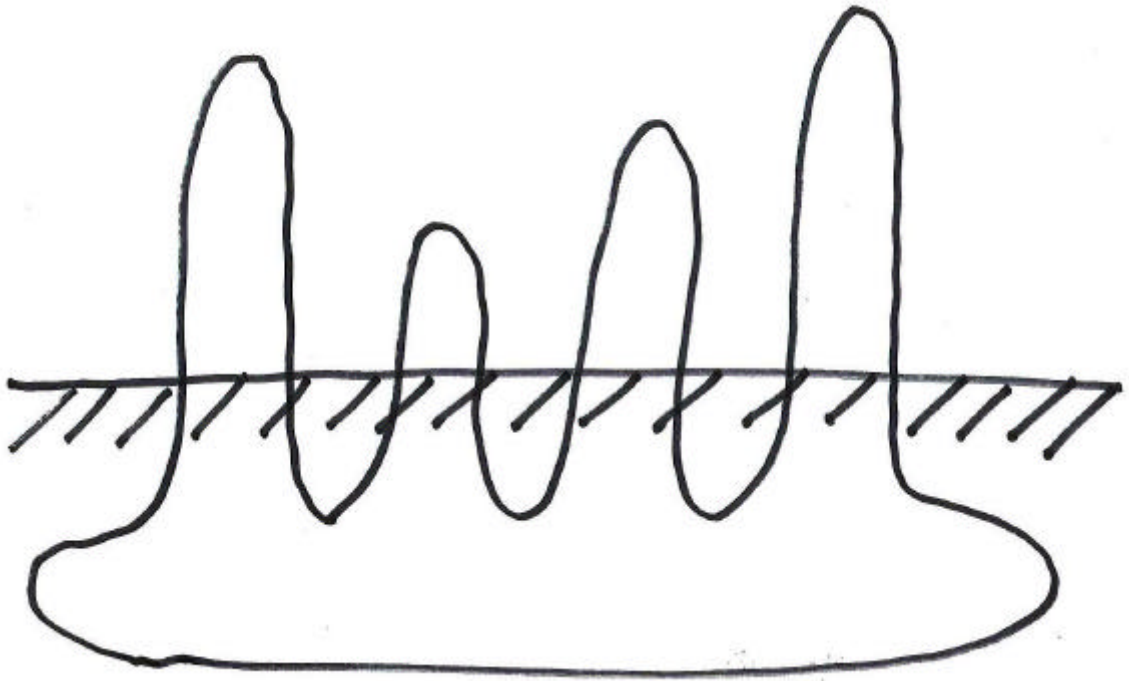
支援者が人々との間に生み出し、残してゆくものが replicable であれば、それは土地の人々自らの手で何度も生み直され、改変や改善もされてゆく、結果として sustainable、つまり、持続可能なものになるのです。

sustainability もよく途上国支援を考える上でのキーワードとして挙げられますが、僕は支援者が生み出すものは、その土地の風土と人々自身の力とやり方で sustain、つまり保持されてゆくべきと考えます。したがって、単なる sustainability ではなく、replicability の方が、より現実的で、示唆に富むキーワードになると思います。

さて、最後のキーワードは、universality です。

これが一番、難しい。本当はこの言葉だけのために、もう一日お話をさせていただかなければならないとさえ思います。が、なんとか僕の考えを伝えてみましょう。

この絵を見て下さい。



これは僕が考える人間のあり方を絵にしたものです。地面の上からによきによき飛び出しているのが、あなたたち、ひとりひとりの人間です。

で、絵をよく見ると、ひとりひとりの人間は地面の深いところでつながっています。つまり、人間というのはひとりひとり違うけれど、根はつながっている。この根の部分を僕は、universality、つまり、普遍的であることと表現したいわけです。

これが途上国支援を考える上で、なぜ重要なのか。

相手と向き合う時、当然、国籍や人種や性や年齢や、いくらでも違うところはある。でも、どこか共通のところがあるはずだ。それを信じたいからです。信じられなければ、お互いの「間」に何かを生み出すことなどできないからです。ここまでは分かりやすいでしょう。

問題はこの先なのです。あなたたちが相手との間に、もし、何かかけがえのないものを生み出そうと思うのなら、あなたたちは、この根の部分。ここへ降りてゆかなければならないのです。

これは並大抵のことではありません。多くの方は、十分深く潜ることを続けられず、「自分」へ引き返してきてしまいます。この場合、「その人らしい」何かが生まれているかもしれない。世間でよく言う「個性的」というのは、このレベルです。

でも、この場合の何かが、相手の「共感」を得られるものになっているか、あるいは、相手と「共有」できるものになっているかという、疑問です。

なぜなら、それは私たちが共通して持っている根っこまであなたが降りて、見つけてきたものではないからです。

僕は本当の意味の「個性」というのは、単にその人らしいだけでなく、多くの人に共感を覚えさせるもの、多くの人と共有することができるものでなければならぬと考えます。つまり、本当の意味の「個性」とは、「その人だけにしかできないけれど、かつ、他者と共有できるもの、他者が共感できるもの」に与えられるべき言葉なのです。簡単に言えば、「独自で、普遍的なこと」です。

途上国支援の現場では、あなたたちは多くの障害に直面することになるでしょう。自分と相手とのさまざまな違い、差異がその障害を生むからです。

その障害を乗り越えるためには、徹底的に自分の底に潜っていくことが必要だと僕は思います。それは universality へ到達し、また自分へ戻ってくる、長く、つらい旅です。

でも、その困難な旅路に耐えたものだけが、おそらく、相手と自分を隔てる多くの違いを乗り越え、相手と自分の間に、何かかけがえのないものを生み出すことができるのだと思います。

その時、あなたは、それを自分で成し遂げたとは思わないでしょう。

相手もあなたに何かをしてもらったと思わないでしょう。

そこに生み出されたもの自体が universality、つまり深いところへの根を持っているからです。誰のものでもないからです。

そういう、自分と相手との間におのずから生まれ出たようなもの、一見、誰のものでもないように見えるものこそ、本当の支援の産物、成果だと思えます。

これは、途上国支援に限った話ではありません。あなたたちがあなたたちらしさを失うことなく、人々との間に、何かかけがえのないものを生み出すためには、つねに、この根っこの部分への困難な旅が必要になると思えます。あなたたちはその旅を続ける力と勇気を持っているのでしょうか。

これは僕自身への問いかけでもあります。universality は僕自身が常に人として心掛けていた目標です。どんな仕事を通じてでもよい。どんな相手とでもよい。自分と相手との間に何かかけがえのないものを生み出すために、自分自身の足元を深く潜ってゆくこと。自分のものでもない。相手のものでもない。誰のものでもない領域への旅です。

そこへ到達し、自分へ戻って来た時、初めて、僕にしかできず、かつ、相手と共有できるものを、相手との間に生み出すことができるのです。

これはとても難しいことです。しかし、同時に、とてもやりがいのあることです。

さて、途上国支援について考える上で、realization と replicability と universality という三つのキーワードを僕は挙げました。これから先は是非、皆さん自身で考えてみてください。特に最後の universality は難しいかもしれませんが。

しかし、これらの言葉は実は、途上国支援に限らず、人が、その人らしく、かつ、人々との間になにごとかを生み出しながら生きていこうとする時、とても大切な道しるべになる言葉だと思えます。だから、難しいかもしれないけれど、皆さんの心に置いて帰ります。僕もこれらをいつも心に置きながら、生きています。だから、皆さんも自分らしく生きながら、是非、これらの言葉について考えてみてください。

もうひとつ、途上国支援という分野に関心のある方にひとこと。

途上国支援をするためにはどんなスキルを身につければよいかと、僕はよく学生さんから聞かれます。でも大切なのは、今も申し上げたように、支援の現場に立ち、相手と交わり、その土地や人々のもつ、潜在的な力に realize、「気づく」ことです。

その後、その力を実現するために、自分と人々と共に何が出来るかを、改めて考えるのです。それが本来の順序です。

だから、スキルが先にあるのではないのです。

もっと大切なのは、人々や土地の力に気づき、どうすれば人々が人々自身のやり方で、よりよく生きることができるかを感じ、考える能力でしょう。

これを「realizationの感度」と呼んでおきましょう。

スキルを身に付けることも大切ですが、僕はむしろ、スキルを豊かに持つ支援者が、自らのスキルに依存する余りに、「realizationの感度」を失い、自らを「助ける側」に固定してしまうあり方のほうをずっと恐れます。

だから僕は皆さんに、先ほども申し上げたように、まずは自分と人々との「間」に眼を向け、そこにある様々なフィルターを取り去り、自分と人々との「間」をより豊かにしてゆくことを、今は勧めたいと思います。

これは、「realizationの感度」を高めることに他なりません。

そして、そのことが、いつかあなたたちが支援の現場に立ったときに、人々や土地の力を見出すことに役立ち、自らのスキルを本当の意味の支援のために費やすことにつながるであろうと僕は信じています。

最後に、ふたつだけ付け足しましょう。

ひとつは、今日、僕がここで話したことは、文章にして、僕のウェブサイト『虹プロジェクト』<http://osa-rainbow.com> で公開します。だから、そこから引き出して、もう一度、よく読んでみてください。

それから、ふたつめ。僕は、今日、とても難しいことを話しました。僕自身にとっても答えが見えないことなのだから、それも当然です。

でも、ここで話した、三つのキーワード、つまり、realization、replicability、universality、これら三つをみごとに満足している途上国支援のひとつの例をご紹介します。

『エンザ口村のかまど』（福音館）という絵本です。この本をぜひ、先ほどの三つのキーワードを頭に置きながら、読んでみてください。ここが realization なんだな、これが replicable なところなんだ、これは universality だ、というふうに。そうすれば、この素晴らしい本を、より一層、深く読むことができるでしょう。ぜひ、お勧めします。

どうもありがとうございました。

以上